

定時制高校における授業「日本語コミュニケーション」での実践

—日本に来た自分自身を語ることの意義—

神山 英子 (三重大学 教育学部)

1. 実践の場の特徴

筆者は、2016年4月から都立定時制高校に3年間、市民講師という立場で在籍していた。そのうち、2017年度に担当していた選択授業「日本語コミュニケーション」の2学期から3学期にかけて実践した授業について発表する。

日本語コミュニケーションの授業には、15名の外国籍の生徒が在籍していた。1年生・2年生・3年生・4年生のすべての学年が在籍し、文化背景も中国・フィリピン・ネパール等様々であり、日本語の4技能のレベル、国籍、学年、学習意欲が異なった高校生に対する「日本語コミュニケーション」という名称の授業を週に1回、2コマ(1コマ45分)担当した。当該授業では、「通常授業についていける日本語力」と「担任やクラスメイトとコミュニケーションが取れる日本語力」の習得が必須であった。しかしながら、履修する生徒のレディネスが異なる一斉授業で、しかも週に1回という限られた時間内で、生徒一人一人が日本語の技能を伸ばすことを目標にした授業は、言語の4技能を伸ばすことのみを目的とした日本語の授業方法以外の方策を考える必要があった。

2. 実践の目標

「通常授業について行ける日本語力の習得」及び「担任やクラスメイトとコミュニケーションが取れる日本語力」が、筆者が担当する授業の目標ではあったが、筆者はそれ以外に、当該生徒の学習への意欲や将来設計の希薄さから、生徒が「自分自身」を知り、生徒の未来につなげられる「日本語コミュニケーション」の授業実践の必要性を感じ、生徒一人一人が今いる自分と将来の自分を見据え、日本語のみならず教科学習や社会勉強を意欲的に進めるような授業実践を目標とした。生徒が人生の目標を持つことがこの授業実践を行う意義であることを目的とした。

2.1 授業実践の目的1

授業を通し、2017年度1学期中は、無気力な生徒や何のために学ぶのか迷う生徒、将来に対して悲観的な生徒も見受けられたことから、生徒が自分自身を知り、なぜ学ぶのか考えられ、発表する経験を通し、通常授業でも臆することなく発言ができることにつながる実践を目的とした。

2.2 授業実践の目的2

授業実践の目的1が最大の目的ではあるが、「書く・話す」ことを通し、日本語4技能が学べること、特に助詞の習得を目的とした。また、4技能のうち、「聞く・読む」ことを通し、「生徒同士の学び合い」ができることも目的とした。

3. 具体的な実践の内容とその過程

「自分の過去・現在・未来」について、「生まれてから小学校入学までの自分」、「小学生の時の自分」、「中学生の時の自分」、「今の自分」、「10年後の自分」に分け、ワークシートに記入し、グループ内で発表する形式を取り、ピアラーニングも取り入れた。最終回は管理職の先生、各クラスの担任の先生に来てもらい、自分自身に関する全体の内容をクラスで発表した。

3.1 授業内容

以下は、2017年12月から2018年2月にかけて実施した授業の概要である。

第1回	生まれてから小学校に入る前の自分について書き、発表し、提出する
第2回	第1回の作文を返却する 小学生の時の自分について書き、発表し、提出する
第3回	第2回の作文を返却する 中学生の時の自分について書き、発表し、提出する 第4回の①の課題を宿題とする
第4回	第3回の作文を返却する ①今の自分についてクラスメートに事前にインタビューをしたことを書く ②自分が自分自身のことをどう思っているか書く ③ ①と②についてグループで話し合って訂正し、提出する。
第5回	第4回の作文を返却する 10年後の自分について書いてグループで訂正し、提出する。
第6回	第5回の作文を返却する 第1回から第5回までのまとめを書き、提出する。
第7回	原稿用紙に書く
第8回	発表・アンケート

4. 結果と考察

当該授業を通し、生徒たちは、自分自身を知り、将来を考え、今何をすべきか考えながら書いて発表することを学んだ。また、ピアラーニングを通し、学び合いの時間を持つことをできた。

そして、発表後のアンケートでは、今回の発表について15人中6人が「うまくできた」、6人が「まあまあうまくできた」、2名が「普通」と回答し、「うまくできなかった」と回答した生徒はいなかった。自由記述では、十分な時間をかけて書いてから発表したことで「発表が怖くなくなった」、「担任の先生が発表を聞きに来てくれてほめてくれたことが嬉しかった」、ワークシートを毎回提出したことで「文の書き方や助詞の勉強になった」等の感想が書かれていた。また、「将来が見えてきた」、「みんなで勉強して楽しかった」「自分のことがわかった」「自分はこんなに成功したことがわかった」などの感想もあった。

アンケートからは、授業実践の目的1である「自分自身を知り、授業で発表することを学ぶ」ことについても、授業実践の目的2「4技能の学習を通し、学び合う」ことについても、概ね達成された。生徒が自分自身のことを発表することにより、将来設計ができたこと、また、学ぶ意欲が希薄な生徒がグループのリーダーになったり、通常クラスではリーダーシップを発揮しないがこの授業では日本語の力がある生徒がリーダーになったりすることで、普段とは違う表情を見ることができたのは、今回の実践の収穫であろう。しかしながら、今回の実践を通し、生徒の「意欲」は進展があったが、今回の実践だけでは「日本語力」の伸びが明らかに示せる指標がない。主観的な「学ぶ」ことには繋がったものの、「どのくらい学べたか」という客観的なデータがない。今後は読み書き能力を中心とした日本語力を明確に伸ばし、それが測れる授業展開が必要である。